
妖怪変化は池の淵で

sora tokiyuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖怪変化は池の淵で

【Nコード】

N4130P

【作者名】

s o r a t o k i y u k i

【あらすじ】

もう、わかってんだろう？

あいつがいった。

善も悪も、そんなものは後付けされたラベルだ。なにをすべきか。そんなものはためえの血に訊けや。

(前書き)

この小説は、WJ 連載中『ぬらりひよんの孫』（原作：椎橋寛）の二次創作です。

BL 要素を含みますので、BL に詳しくない方は、ご遠慮ください。

過激な描写は全くありません（書けません・・・）なので、年齢制限はありません。

リク才視点のお話です。

『ありがとう！ 奴良くん！ すっごく助かったよー』
隣のクラスの女子がにやっと笑った。二つに結んだ髪が肩の上で
ひらひらと揺れる。

『役に立てて嬉しいよ。困ったらまた声かけてね。ボクでできるこ
となら、いつでも助けるよ』

『ほんと、奴良くんっていいやつだね。なんかナイトみたい』

『そんなんじゃないよ。普通だよ』

『そっかな。でもほんと助かった。ありがとう。また明日ね！』

『また明日』

夕陽の中で、短いスカートがぴらんと跳ねた。

充実している。そう実感できる瞬間だ。

今日も学校では良い人度がアップした。「ありがとう」と笑顔で
いわれると、大きな花がぼんつと咲いたみたいに、胸の内嬉しさが
弾ける。そんな日は、学校からの帰り道の全行程をスキップで帰
れる。少しの疲労と、大いなる達成感をもって、布団に潜り込み、
安らかな眠りにつくことができる。

そういう毎日が続けばいいと思っていた。軽く百を超える妖怪た
ちに囲まれながらも、立派な人間であるために、日々努力する。小
学生だったあの日、誓ったのだ。

妖怪になんて、なるものかと・・・

けれど、最近、それがうまくいかない。

学校では「いい人」であるけれど、日が落ち闇が満ちてくると、
ボクは変化を始める。スキップは一步ごとに重みを増し、家に着く
頃にはただ歩くだけだ。膨らんだ嬉々は、沈みゆく太陽とともに次
第に弱くなり、代わりに重く湿った空気が胸を占める。

おまえは本当にそれでいいのか？

頭ではなく、身体が問うてくる。自分も知らないどこか深いところ

ろから呼びかけてくる。血が、ざわざわと小波を立てて揺れる。思い出せ。

ボクに命ずる。

あの日、血の熱さを初めて感じたあの日から、ずっとどこかにひっかかっていた。自分からは、触れないようにしていた。それがあちこちから染み出してくる。

晩春のまだ少し冷たい風から身体を守るように、両腕で自分の身体を抱いた。

「あれ、若？ どうしたんですか？ こんな庭の隅っこで。晩ご飯にはまだ早いですよね。あうっ、もしかしてまたマスコミ査定ですか？ オレまたやつちやいました？」

水が散る軽い音がした。池から河童が覗いた。

「あー、河童か。違うよ、査定じゃないよ。ちょっと考え事してただけだ」

河童は、するりと池から身を滑らせ、ボクの隣の石にちょこんと腰掛けた。

「オレでよければ喜んで相談に乗りますよ」

「河童に聞いても・・・」

「なにいつてんスカ。若のことは、幼い頃から一緒に遊んだこの河童がなんでも知ってます！ どうぞどうぞ！ なんなりと！」

「じゃあさ、善と悪についてどう思う？」

河童が固まった。

「・・・すいませんでしたっ！ 若のことならなんでも知ってるなんて、この河童、僭越でしたっ！」

180度のお辞儀したら、河童の頭から皿が落ちた。

「別にいいよ。ボクだってわかんないんだから」

落ちた皿を拾ってやる。よく割れなかったなと思ったら、プラスチック製だった。軽い。

「すいません、若」

「最近の皿ってプラスチックでできてるんだ」

「あ、オレ、ドジなんで、ちっちゃいときからよく割っちゃって、怒られてて。なんで、本物は本番にとっておいて、これは日常用に開発したんです。軽くてラクだし、落としても割れない優れたものです」

河童の説明にはつつこみどころが満載だが、一番気になるところをきいてみる。

「本番って？」

「決まってるじゃないすか」

河童がひどく嬉しそうに笑った。

「百鬼夜行ですよ、若」

どくり。

心臓が脈動した。身体の血が逆流を開始したみたいだ。一瞬、息が止まる。次に、どくどくと強い力で新しい血流が生み出された。胸元を右手で握る。制服がシワになるのも構わない。強く、握りしめる。息を継ぐ。それでも暴れ出した鼓動は収まらない。

百鬼夜行。

百鬼の魑魅魍魎を従え、その先頭をゆく。そこに立つものだけが、畏れを纏う。その一言で、すべてを統べる。

熱が生まれた。眠っていた血がボクに満ちる。身体中が歓喜を叫ぶ。理性の箍は外れ、本能が充ち満ちる。その甘く熱い血が、姿形さえも、変えていく。

「若？」

河童の声が遠い。

闇が押し寄せる。目の前を、白い花卉が舞う。桜の花びらだ。古い桜木の枝に、あいつがいる。

観念しろよ。

もう、わかってんだらう？

あいつがいった。

善も悪も、そんなものは後付けされたラベルだ。なにをすべきか。そんなものはためえの血に訊けや。

白い花びらが舞う。白が、すべてを埋め尽くす。

「若？ 大丈夫ですか？」

河童の冷たい手が、胸を掴んだままのボクの手にぺたりと触れた。白が消えた。青々とした水を湛えた池が、ぽつんと目の前にあった。水紋一つない鏡のような面に、あいつがいた。

長い髪。黒い着物に白い羽織を肩にかけ、長刀を担ぐ。切れ長の目に感情はない。決して惑うことはないだろうその強い瞳が、まっすぐに「ボク」を見据える。

「わーい、若だ、若だ！」

「河童、おめえ、なにはしゃいんでんだ。うるせえよ」

「だって嬉しいじゃないですか。やつぱり若だなあって」

河童が笑う。きらっきらと輝いている。

「そういうもんかよ」

座っていた石から立ち上がる。

「どこへ行くんですか？」

「散歩。おめえも行くか？」

「はい！ 喜んでお供させていただきます」

「一鬼夜行だな」

「若とオレで二鬼です」

「オレは数に入れねえんだよ。おまえらと一緒にすんなよ」

「ほえー、そうなんですか」

「ふふっ、冗談だ」

「若ー」

空を仰ぐ。濃い蒼の中に、薄くか細い下弦の月が、淡い光を投げている。ちっぽけな人間と、ちっぽけな妖怪を見下ろして、笑っている。

「いい夜だ」

そう思つた心は、人だろうか。妖怪だろうか。

そんなものはためえの血に訊けや。

どこかでそんな声がした。

(後書き)

河童と話しているうちに、熱くなって、変化(へんげ)と読んでくださいませ)しちやったりクオです。河童は大喜びですよねえ。青や黒だと騒がしすぎちゃいそうだけど、河童や首無したら、夜リクオが夜のお散歩に連れて歩くのにちょうど良さそうな感じがします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4130p/>

妖怪変化は池の淵で

2010年12月11日09時40分発行